

## 第1回 情報発信・合意形成に関する検討部会議事要旨

日時：平成15年12月12日(金)10:00～12:00

場所：阿蘇いこいの村会議室

### (1) 阿蘇における草原再生と当検討部会の進め方について

- ・ 阿蘇での草原再生に関する取り組みは、自然再生や農業を支援するシステムのあり方を検討する上で、象徴的な大きなテーマ。外からの知恵を集めていくためにも、情報発信は重要な役割を果たす。そういう意味で、草原利用と環境教育がメインに掲げられているのは、少し物足りない気がする。
- ・ 言葉の使い方に十分注意し、現場で悩みをかかえている人々が納得し参加できるような事業の進め方を望む。草原の維持・保全や利活用に関するこれまでの取り組みを検証してみることも必要。

### (2) 草原利用・環境教育等の推進に関する基本的考え方について

#### <阿蘇の草原の価値と交流の意味>

- ・ 阿蘇の草原の魅力は農家の人が牛を飼って、その営みを通じて他に類を見ない自然が維持されている点にある。人が関わっているからこそ、阿蘇の自然が成立していることを原点とすべき。
- ・ モーモー輪地切りの例でわかるように、土地をうまく利用するには、地元からの発想に加え、外からの知恵が必要だと思う。
- ・ 草原の価値を住民の人が認識し、誇りを持つ人が増えれば、阿蘇は自然と活性化する。ただし、住民だけの力ではいろいろな取り組みは不可能であり、これからは行政や研究者などとの連携に基づいた農業が必要となっている。

#### <草原の利用>

- ・ 草原を体験してもらうことによって、草原維持のための合意形成を図っていきたい。
- ・ 自然体験学習の民間会社で一番人気のあるプログラムは、草原の中をマウンテンバイクで走ること。草原をもっと活用したいが、牛を飼育している場でもあり、色々な課題もある。草原を活用したモニターツアーについては、ビジネスに発展するような取り組みを望む。
- ・ 人に紹介することによって、当たり前とっていたことの価値を気づかされるもの。エコツアーなどの取り組みを継続させていくことはそのような意味もある。草原に入るための注意事項や留意点などを検討し、草原を歩くルート・ルールを決めることで牧野組合との合意形成が図られれば、エコツーリズムを推進できると思う。また、単なる自然観察を超えて、どう阿蘇の魅力を提供していくのかも課題である。
- ・ 草原を案内する人や牧野を提供した人にお金落ちるなど、直接、地元の人に利益が出るしくみがあると受け入れやすくなる。

### <環境教育の進め方>

- ・ 環境教育のターゲットをはっきりと決めて、資料は分かりやすいものにすることが必要。
- ・ 環境教育については、草原は牧野組合の人達をはじめ人々の営みがあってこそ維持されていることを掘り下げて欲しい。農業教育など、もう少し具体的な目標に絞り、草原だけでなく集落・地域の農業や畜産業への理解を深めてもらいたい。
- ・ 環境教育の推進に関しては、自然案内人協会や畜産農家、牧野組合の方々との連携が必要と思っている。

### (3) 情報発信と共有について

- ・ 利用とともに草原を維持するための情報を、同時進行的に発信する必要がある。
- ・ 地元を誇りを持った人を増やすためには、外との交流が不可欠。地元の人々の誇りや意識を高揚させるには、シンポジウムのような形式だけでなく、じっくり情報交換をすることが必要。
- ・ 情報発信にあたっては、受け手の側の立場や意識などに配慮した内容、表現としたい。

第2回 情報発信・合意形成に関する検討部会／拡大意見交換会  
「草原再生を支える都市・農村交流に向けて」議事要旨

日時：平成16年2月25日（水）9：30～12：30

場所：ホテルサンクラウン大阿蘇 会議室

第1部 基調報告

「農山村の人間論的価値と阿蘇の魅力」／早稲田大学教育学部教授 宮口侗迪氏

「自然案内人が伝える阿蘇の草原と文化」／阿蘇自然案内人協会会長 高橋佳也氏

第2部 交流分科会

第1分科会「都市・農村交流の推進と草原再生に向けた情報発信」

(1) 報告

「地産地消を軸とした都市・農村交流への期待」／阿蘇フォーラム事務局長 宮本孝志氏

「『阿蘇ファン』づくりの試みと反響」／阿蘇テレワークセンター所長 高野勝則氏

「ファームステイを受け入れて」／農家レストラン・民泊経営者 小野聖子氏

(2) 意見交換会

<都市・農村交流について>

- ・ 子供の頃から農村と交流し、子供の頃から都市と農村のつながりを認識させることが必要だ。
- ・ 阿蘇の価値、阿蘇の見せ方は、外からではなく内からの発想や知恵から生まれるものだ。外からお客さんをたくさん呼び込み、どうお金を落とさせるのかを考えるというより、地元で取り組んでいる人たちをどう応援していくかという視点が欲しい。
- ・ 阿蘇での過ごし方の満足度を高めて、繰り返し来てもらい、ゆったりと過ごしてもらい、感動してもらえば、観光客の数は減っても良い。
- ・ まずは農業の現場をお客さんに見てもらい、野菜など食物への理解を深めてもらいたい。
- ・ 修学旅行生の受け入れでは、事前学習をしてくる子供としてこない子供とでは子供の意欲、理解度が全く違うので、ぜひ、来る側は事前学習をきちんとしてきて欲しい。
- ・ 今後はファームステイ受け入れ農家の過重な負担にならないように、子供たちが伸び伸びと体験できるような「丸ごと農家体験」の時間と場所の提供も必要だ。

<情報発信について>

- ・ 地域再生や草原・環境問題を子供たちに上手く伝えていくことが重要であり、小中学生向けの教材の開発や情報提供システムの構築が必要だ。
- ・ 阿蘇の下流域には、元気で何か貢献したいと思っているお年寄りが大勢いる。是非、その人たちに向けた情報発信のやり方を考えてもらいたい。
- ・ 情報は、村に住む人たちから発信しなければいけないと思う。そのためにも、住む人が誇りを持ち、役割があるということを考えながら暮らすことが重要だと思う。
- ・ 現場から情報発信するには、住んでいる人が阿蘇の良さを納得し、そしてそれを自分の言葉で伝えることが大切である。

- ・ 情報発信も、地産地消で進めたい。地域の人がホームページの作成に携わり、地域活動と密着して、常に活動と連携した情報発信やコンテンツづくりをしなければならない。
- ・ 地域づくりにもコスト意識は必要。地域経営の観点から行政、営利団体、非営利団体による連携のしくみづくりが重要である。

## 第2分科会「都市・農村交流への牧野の活用とルールづくり」

### (1) 報告

「環境学習提供者から見た阿蘇と草原利用への期待」／

(財)全国修学旅行研究協会本部部長 山本精五氏

「牧野活用のための条件～全国エコツーリズム大会 in 阿蘇におけるトレッキングコース設定の事例から」／

阿蘇町ホテルの会会長 湯浅陸雄氏

### (2) 意見交換会

#### <牧野の活用に関する牧野側の意向>

- ・ 草原への立ち入りに関しては、現在は牛の放牧をしていないので、全面的に開放している。私の牧野ではなるべく観光にいらした方を受け入れ、対応していきたいと思っている。
- ・ 私は畜産農家としては草地に人が入ることは一番嫌で、都市から人は来てほしくないと思っている。
- ・ 草原に入る観光客のゴミ処理、後始末などのマナーがあまりにひどく、バーベキュー用に持ち込んだ石で機械が損傷したこともあった。

#### <牧野の活用に関する観光業者側の意向>

- ・ 草原は観光客から景観としかみられていない。草原を体験の場として活用していくことが新たな阿蘇観光の1つの切り口になると思う。草原の再生に対し観光という観点からチャレンジしていきたい。

#### <牧野利用のルール・条件>

- ・ 問題は野草を採る方がいたり、牧野内にゴマシジミという貴重なチョウが生息しているが、それを捕る人があとをたたないこと。
- ・ 牧野組合として牧野を利用する時に守ってもらいたいことは、牛が逃げださないよう、牧野の門扉をきちんと閉めていくこと、車を乗り入れないこと、空き缶や空きびんなどをきちんと持ち帰ること、湿地には足を踏み込まないこと、牧場内に自生している植物などの採取をしないこと、などである。

#### <地域へのメリットの創出>

- ・ 牧野を利用させていただく上において、何らかのかたちでお礼をすることによって、牧野側にメリットを提供することも必要だ。
- ・ 修学旅行生に輪地焼き体験をさせ、充実した時を過ごすことができた。今回はボランティアだったが、組合員に対する資金面での援助ができるようになればよいと思った。

#### <地域側での教育や環境保全への取り組み>

- ・ 地元の人が地域のことを知り、かつ誇りを持てることが重要であり、感受性の強い小学生の頃から野焼きの見学・体験などをさせるべき。
- ・ 草原の谷間などに農業用資材や粗大ゴミが捨てられているのを見かけるが、農村の人々にも環境を大切にするという心構えが必要だ。

### 第3部 全体会

#### <草原再生について>

- ・ 40年前の自分の草原に対する原風景を思い出してみ、「草原再生」はいったい何処を目指すべきなのかと、今日は非常に考えさせられた。
- ・ 私たちの原野は農業法人にして、全部、個人の財産になっている。先祖からの遺産を自分たちの財産と考え、守り伝えていく義務があると思う。
- ・ 野焼きに関する昔からの知恵として、雪焼きや夜の野焼きがある。自然の理にかなっており、作業も楽で安全なやり方だった。ただし、夜の野焼きは今は消防法の許可が下りず、できない状態になっている。
- ・ いろいろな規制があって昔流のやり方がやれないことについては、特区などを利用し、阿蘇発の新しい制度作りを世間に働きかけてもいい。日本に1つしかない場所だから、ここでほかでは通用しない仕組みを考えてもよいのではないか。

#### <都市・農村交流について>

- ・ 草原は本当に宝物だという共通認識を持って、都市・農村交流に取り組んでいく必要がある。
- ・ 儲けだけを追求すれば、いずれは飽きられてしまう。都市の人と語り合うことにより、精神的な喜びを伴う交流を行うことが今後とも重要ではないか。
- ・ 問題は観光業者と地元の農業者間の交流がないことだ。共通の体験をしてみることから始めるべきではないか。
- ・ 地産地消は、人・物が循環する中で、経済的な付加価値が生まれること、自分たちの取り組みがちゃんとあることが必要だが、これはやはり縁づくりだと思う。農業をやる人、そこを訪れる人、観光業者など、いろいろな立場の人がいろいろな縁を結んで、その間に物やお金が行き来する。そのためには、交流ということが非常に大事になるが、福岡、熊本ぐらいまでは仲間にしていいのではないか。

#### <草原を利用した自然体験・エコツアー等について>

- ・ ゴミ捨て問題は論外の話であり、環境保全や自然保護等の観点からルールを設けて対処していくべき。
- ・ 受け入れ態勢、窓口の一本化を望む。そこで、体験のツールの作成からインストラクターの手配、農村民泊の配宿、安全管理の面までやっていただいたほうが、送客側の支持はより高まるし、成功する。
- ・ 年配の方は名人、達人の宝庫である。その人たちが、観光客や子どもさんたちに「すごい」と言われると目が光ってくる。ぜひ、取り組んで欲しい。